

石川の巨樹 金沢市の緑について考える

1 森の都金沢

都市の雅称として、「もりの都」があり、仙台市や熊本市、そして金沢市の三都市が有名です。

仙台市は、1970（昭和45）年に制定されました「公書市民憲章」に、「杜の都」と明記しています。

また、熊本市では、1972（昭和47）年に「森の都」都市宣言で、「わが熊本市を「森の都」とすることを宣言する」としています。

一方、金沢市では、1974（昭和49）年に市議会で議決されました「緑の都市宣言」の中で、「誇り高き、森の都金沢」を永遠の緑のまちにする」と宣言をしています。

いずれも、城下町で歴史あるまちであることは共通していますが、都市の地形や気象、災禍、市民気質などによって、それぞれ特有のまちとして発展し、今日に至っていると考えます。

2 河岸段丘がもたらす緑

そこで、金沢市の緑について考えてみたいと思います。

まず、写真が示すとおり金沢の地形は、犀川と浅野川の2本の河川が流れ、その間に小立野台地があり、先端には金沢城公園が、浅野川の北側には卯辰山丘陵が、犀川の南には



写真中央の緑は兼六園周辺文化の森

寺町台地や野田山丘陵が存在します。いずれも2本の河川が、平野（扇状地）や台地（河岸段丘）、そして斜面（段丘崖）が出来る等、変化の多い地形となっています。

この中で特筆されることは、台地からつながる斜面の緑です。まちの中心部まで伸びた斜面は、建築が規制され斜面の保全が図られていることにより、立体的な緑が視野に入ってきます。市の中心部に金

3 まちづくりと緑

次に、加賀藩前田利家が、1583（天正11）年4月に金沢城に入城し、本格的なまちづくりが始まって以来四百年、金沢で大きな災害や戦禍にまみえなかった為、明治や大正期の都市構造（街路、用水など）が今も良好な状態で残り、独特のまちの雰囲気醸成されています。

特に金沢の用水については、市内に55本、延長150kmもの用水が今も流れており、農業をはじめ防火や消雪、水と緑の快適な市民生活に大いに寄与しています。



長町を流れる大野庄用水とエノキ

半面、高度経済成長など都市化の推進により全国的に緑が失われ、画一的なまちが存在する中、いかにして金沢市の個性を保ったかについて、最後に述べさせていただきます。

それは、兼六園や金沢城などの歴史遺産が多い旧市街地は、「保全を旨とする」ことをまちづくりの基本理念としていくことです。従ってやむを得ず開発しなければならぬところ（仙石町通り、広阪通り、本多町通り等）にあつては、できる限り開発を少なくし、残る周辺の部分は極力残し保全してきたことに他なりません。

このことは、私たち「石川県巨樹の会」の活動理念とも相通するものがあります。老樹・巨樹を守ること、地域の景観を守ることと同義と考え、引き続き、同会の活動に取り組んでいきたいと思えます。



本多通りの旧金沢一中のモミノキ

（石川県巨樹の会 上田 哲男）